

## 《研究ノート》

### 友情への「旅」

——ラジーシチェフのひとつの読み方

坂内 徳 明

A・ラジーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』

(一七九〇年、以下『旅』とする)が構想・執筆され、その印刷と出版が契機となって作品と著者がさまざまな反応を体験し、社会もまた、この著者と作品にたいして直接的な対応を体験した時代——すなわち、一八世紀後半・末から一九世紀初頭にかけての時代は、ロシア史の上でひとつの大きな過渡期であった。むしろ、そのことは政治史、社会経済史、社会史などをはじめとしたさまざまなレベルで検証すべきであるが、この時代に関するソビエト・ロシアの研究者であるB・クラスノバールエフ、A・コプイロフ、ないしはJu・ロートマンらの仕事に従って名付けるところの文化史のレベルで考えるならば、どうであろうか。この問題をラジーシチェフの『旅』をテキストとして考察することが本ノートのねらいである。

一八世紀後半・末から一九世紀初頭にかけての時代が西ヨーロッパのみならずロシアにとっても、民族意識の発生と、それ

にもとづく民衆文化の発見の時代にあたっていたことの全体像は、H・ロジャーの著書『一八世紀ロシアにおける民族意識』(一九六〇年)、特にその第四章「フォークの発見」において詳細に叙述されている<sup>32)</sup>。そしてラジーシチェフの『旅』を具体的事例に取り上げ、この「民衆の発見」というロシア文化史上の事件がいかに表現されていたのか、について、筆者はすでに別稿で述べた。そこで筆者は、ラジーシチェフのテキストを素材として、ナロードとその文化が発見されようとしていたこと、その発見が彼のメランコリイによるものであり、それは時に、彼の情動と思念の深さにもかわからず、ナロードとその文化を「切り捨て」、ナロードを普遍化・理想化するナロードイズムを生んだことを指摘したのである<sup>33)</sup>。

ところで、ラジーシチェフの自己省察とメランコリイによってこうしたナロードの文化が視野にはいつてくる一方、この省察とメランコリイの果てに見えてくるひとつの「社会」があった。それは友人との交友関係・友情によって出来上がるべき「サークル」である。

#### 二

『ペテルブルグからモスクワへの旅』の中で、旅行者の「友人」として名指しされて登場する人物は三人である。すなわち、「チュードヴォ」の章の友人Ch、「ザイイツェヴォ」の章で旧友として登場するクレスチャンキン、そして、『旅』全体の序文とも言うべき冒頭の一文の宛て先となっている「最愛の友人A・M・K・」がそれである。この中で、Chの頭文字とA・

M・K・は、それぞれ実在の、しかもラジーシチェフとは、一七六二年の近侍学校、一七六七―一七七一一年のライプツィヒ留学時代に親友であったチェーリシチェフとクトゥーゾフである。そして、クレスチヤンキンについては、ラジーシチェフの最初の妻の兄弟のA・ウシヤコフ、その伯父のA・ルバノフスキイといった人物のイメージが使用されたと考えられている。<sup>(5)</sup>

この中でP・I・チェーリシチェフ(一七四五―一八一一年)について言えば、ユカテリナ二世によって彼も『旅』の執筆に関わったのではないか、という疑いをかけられたほどであるから、ラジーシチェフとはきわめて親しい間柄であった。

『旅』の中の「チュードヴォ」の章で彼は、旅の途上にあつたラジーシチェフを追いかけてきて、無責任な役人の批判を一方的にしやべりまくる。あづくのはてに彼は、都会には嫌気がさした、「どこか人の行かない所へ行くんだ」と言い残して立ち去る。人間の名が知られない場所へ行くんだ」と言い残して立ち去ることになっている(次章の冒頭で、ラジーシチェフはこの親友を追いかけ、追いついて隠遁を思いとどまるよう説得する役回り、オブティミストとして描かれる)。そして、その言葉どおり、チェーリシチェフは一七九一年五月にペテルブルグを立ち、二月までの半年あまりを北ロシアを旅行して回っている。その旅行目的については、これまでいくつかの説明がなされてきた。彼の書き残した『一七九一年北ロシア旅行記』(一八八六年刊行)の叙述をもとに、修道院巡り、土地調査、物見遊山、そして、ラジーシチェフとの関係ゆえの弾圧・迫害からの逃亡、また、ラジーシチェフの弟のモイセイの訪問などといったもの

がそれである<sup>(5)</sup>。彼の北ロシア旅行の目的が、たとえ直接にはラジーシチェフ弾圧の巻き添えから逃がれるものであったとしても、『旅』出版時にアルハーンゲリスク税関に働いていたラジーシチェフの弟モイセイとの面会をはじめとして、ラジーシチェフとの関係を断ち切りたくはない、という気持ちに裏付けられていたことは重要である。そのことをもつとも象徴的に示すのは、『一七九一年北ロシア旅行記』に記された、彼自身が見たとされる夢の場面である。

ペロセルスクにあつた時、一月二七日から二八日にかけてのことだが、夢を見た。それは、こういうものだった、私と、フォードル・ヴァシリエヴィチ・ウシヤコフ、クトゥーゾフ、それにラジーシチェフ兄弟二人がひとつの家にいた。その家からは、ラジーシチェフとクトゥーゾフは走り去つたが、彼らは再び捕まらうとした。ラジーシチェフを私は見たが、クトゥーゾフは見なかった。<sup>(6)</sup>

謎ときの必要な夢であり(「家」は「牢獄」なのだろうか)、解釈はさまざまにできるだろうが、これが、まさしくライプツィヒ留学時代の親友たちの群像であることに間違いない。加えて、チェーリシチェフとラジーシチェフとの関係、特にチェーリシチェフ自身の気持ちについて言えば、それがラジーシチェフの行動と思想への全面肯定であるかどうかは別に、青年時代の交友関係への追想は、かつての友情に変わりのないことを表現したものである。留学から戻った時点で、二人はマツ

ンの支部を訪問するが、入会はしなかった。そして、少なくとも資料の示す限りでは、『旅』出版直前まで、二人の交友関係は表面上は問題なく続いていたとされているのであり、ラジーシチェフは『旅』の原稿をチェーリシチェフに委ねた、あるいは、『旅』の出版そのものにもチェーリシチェフは参加したのではないかと、という仮説がかなりの根拠で主張されているのである。

もっとも、『旅』の中の叙述を読む限り、この二人の間には、大きな意識のずれがあるかのように見える。その記述がラジーシチェフの気持ちそのまま反映していたと考えるならば、彼自身はチェーリシチェフにたいして全幅の信頼と友人としての満足感をいだいていたとは思われぬふしがある。チェーリシチェフは、わざわざ追いかけていったラジーシチェフの忠告にまったく耳を貸すことなく、「怒った様子で私と別れを交わして」あたふたと立ち去っていったとあるからである。

チェーリシチェフの夢に登場するF・ウシャコフは、留学中の一七七〇年六月にライプツヒで二一歳（ラジーシチェフの記すところでは、二三歳）で死んだ、きわめて才気あふれる人物で、死を宣告されて冷静にそれを聞き、毒を要求したとされている。ラジーシチェフは、ともにフランスの思想家のエルペシウスに熱狂したのをはじめとして留学時代の竹馬の友として、彼に絶大の尊敬の念を持っており、彼から全生涯に決定的な影響を受けた。むろん、この親友の自死に大きなショックを受け、自殺、さらに死そのものに関するラジーシチェフの思索はこの時のショックに始まる。そして、クトゥーゾフに捧げら

れた『ウシャコフ伝』（一七八九年<sup>?</sup>）は、ラジーシチェフのセンチメンタリズム作品の傑作とされるのである。

そして、この『ウシャコフ伝』が捧げられ、チェーリシチェフの夢にも登場するA・M・クトゥーゾフ（一七四九—一七七年）も、一七六二年の近待学校への入学以来の親しい友人だった。しかし、『旅』では、その「最愛の友人A・M・K・へ」と題される冒頭の文章で次のように語られている。

理性と心が何を生み出そうとも、ああ！感情を同じくするわが者よ、それはきみに捧げられるだろう。多くのもの  
にたいする私の考えがきみと違ったとしても、きみの心は  
私の心とひとつの調子で鼓動する——したがって、きみは、  
わが友である<sup>(8)</sup>。

ラジーシチェフとクトゥーゾフとの関係については、いくらか説明が必要である。というのも、ライプツヒ留学時代の後、ひとつはラジーシチェフの結婚問題（一七七五年）、もうひとつはクトゥーゾフのマソンへの接近（一七七三—一七七五年）を理由として、この二人の友情はスムーズには展開しなかった（『旅』は、献辞にその名前があることから、その本が、当時ベルリンに居たクトゥーゾフのもとへと贈られようとしたが、当局の手に入る事になった）。クトゥーゾフはその後マソンに積極的に参加し、同じくマソンであった文学者・ジャーナリストのN・ノヴィコフの協力者として活躍していた。したがって、上で引いた文章が、そうした交遊関係の回復を目指した

ものであることは明らかである。

しかし、このクトゥーゾフにたいする言葉は次のように続く。

私は、人間に慰めをあたえる人間をそれ自身の中に見出した。「自然の感情の目から覆いを取り去れ。そうすれば私は幸福となるう」この自然の声が私の体内で高く鳴り響いた。……(中略)……私は、すべての仲間が自分と同じ善行に加わることができることを感じた——こうした考えによって、これからきみが読もうとする文章が書かれたのである。私は自分にこう言った、もし、私の意図に賛同してくれる者がいるならば、善良なる目的に免じて思想の拙い表現を容赦してくれる者がいるならば、わが同胞の不幸を私とともに苦悩してくれる者がいるならば、私の歩みを励ましてくれる者がいるならば、そうした誰かを私が見つけられるならば、私をはじめ困難な仕事から豊かな実りもたらされるのではないか……そうした誰かを遠くに求める必要があるだろうか。わが友よ！君はわが心の近くにいる。それゆえに、きみの名前がこの書物の冒頭を照らしてほしいのだ。

最後の部分は、時代の定型的な表現となっている。友人宛て書簡はこの時代の「文学の主要なジャンル」となっていたからである。したがって、先に引いた『旅』の冒頭の、クトゥーゾフへの思いと友情回復を訴えるという印象は、ここでも変わらなかに見える。しかし、「そうした誰かを私が見つけれらるな

らば」という文章に続く、いわば友情成立の条件を提示する箇所は、友情たるもの一般論の形をとっていて、これは、そのままクトゥーゾフ個人への思いとは結びつかない。むしろ、クトゥーゾフという形を通して、いまだ見えない友人を求めるかのようなのである。クトゥーゾフとの友情の成立要件は「心」*copdine*が共有されていけばよい、とあるだけで、ここで提示されている条件はそれにとどまることなく、はるかに数多く多様だからである。あらためて、この『旅』が活字として出版されたことを思い返してみるならば、この点は説明がつく。それは、活字というメディアによって、著者は不特定読者という「新しい友人」を求めたのではないか、ということである。たしかに献辞そのものも、それに本自体も、クトゥーゾフに向けていた。しかし、同時にラジーシチェフは、未知の読者という友人に向けたメッセージをこの『旅』にこめたのだった。「そうした誰かを私が見つけれらるならば」、この『旅』の執筆という難事業も実りを生む、とあることはそれを示すものである。

### 三

主に教会・修道院の場で大きく育成されていったロシアの友情の歴史は、一八世紀のピョートル大帝の時代になって大きく変質した(例えば、ピョートルと道化師ニキータ・ゾートフの関係は友情論の中でとらえてよい)。むしろ、それまでも俗世間での友情も、そして教会・修道院での友情も継続していったが、ピョートル期に頂点となる「文化の世俗化」以後、宮廷の

サロンという新しい場で友情は發展していった。さらに一八世紀後半には、フリーメイソン(マソン)という、さらにもうひとつの新しい友情の空間が作られた。しかし、こうした宮廷にも、マソンにも飽き足りないインテリゲンツィヤは、新しい人間関係と友情を求めて模索を続けていた。ラジーシチェフは、まさしくそうした人々のひとりだった。彼と並ぶ一八世紀後半の最大のインテリゲンツィヤであったN・ノヴィコーフがマソンと深く関わったのにならして、ラジーシチェフはマソンには、興味こそ示したものの、一線を画していた(マソンに特徴的な「神秘思想」への批判は、『旅』でも「ポドベリョージエ」「プローンニツィ」「ザーイツェヴォ」「クレースチツィ」「トルジョーク」など数多くの章で繰り返しおこなわれているとおりである)。そうした彼は、青年時代からの友人たちとの友情に思いを馳せながらも、それだけでは完全に満足しえなかつた。彼の孤独感<sup>(9)</sup>は、すでに一七七三年の習作とも呼ぶべき『ある一週間の日記』<sup>(10)</sup>にもはっきりと描かれている。この作品は、一日もの間、友人と別れて孤独の中にあつた自分の心象風景を描いたもので、ロシア文学で「最初のセンチメンタリズムの作品」とも言われるものである。ここには、孤独を癒す慰めは、自然や環境ではなく、友人、知人といった人間にしか求められないラジーシチェフの本性が明瞭に読み取れるのであり、つねに孤独からの解放とそのため<sup>(11)</sup>の友情模索に熱中するという彼の志向性を確認できるのである。もっとも信頼していたと思えるウシヤコーフは早死していたし、チエーリシチェフにも、そして『旅』を捧げたクトゥーゾフにもラジーシチェフは完全に満足

していなかつたと見える。だとすれば、新たに読者という友人を見つめるべく、『旅』は書かれたのではなかつたのか。

プーシキンは彼のラジーシチェフ論(一八三六年)の中で、「ラジーシチェフはひとりである。彼には同志もいなければ共謀者もない」と記している<sup>(12)</sup>。これは、『旅』の印刷・出版が彼のまったく無謀とも思える個人的・オプチミスト的行為であつたこと、そして、周囲に表面上は支持者がなく、彼がまったく孤立無援であつたこと、さらには、彼が時代の推移とともに急速に忘れられつつあることなど、さまざまな問題を含む指摘である。ただ、ここで注目したいことは、プーシキンの時代とラジーシチェフの時代とは、友情と、そしてそれにもとづいて出来るはずの社会の在り方がまったく異なつていゝ点である。ラジーシチェフの時代には、一八世紀初頭に始まつたサロンを場とした友情こそ衰退し、かわりに、留学仲間といたつた、ごく少数の友人による社会こそあつたものの、すぐ後のデカブリストたちの結社とそれに直接・間接に係わつたサークル、グループは、いまだその具体的な活動を開始していなかつた。だからこそ、「ラジーシチェフはひとり」だったのである。そして、ラジーシチェフという個人によるヒロイックな行為とちよつど入れ替わるかのように、一九世紀にはいると、ペテルブルグやモスクワだけでなく、地方都市もふくめた各地にきわめて多数のサロン、グループ、サークルが陸続と生まれていゝたのである。そのリストと概観は、M・アロンソンとS・レイセルの共著『文学サークルとサロン』(一九一九年)、N・プローツキイ編『文学サロンとサークル』(一九三〇年)<sup>(13)</sup>に見

ることができるが、それらは、内部における貴族の子弟と雑階級人(ラズノチンツィ)の闘争、政治・思想・経済・農事・文学など話題の多様性、アマチュア・ディレクターとプロとの交錯、家庭的性格と社会的性格との対立などなど、多くの問題をかかえながらも、全体としては、一八三〇年代までの過程で、ロシア社会というひとつのシステムの形成へ向けてパブリックな場を提供したのである。

## 四

したがって、ラジーシチェフは早すぎたのかもしれない。しかし彼は、友情という形ではあれ、ひとつの社会を模索していた。そして、こうしたインテリゲンツィヤ同士の友情で社会が出来上がっているのではないのか、と彼が考えようとした時、

そうした彼の結論と認識を裏切るかのように、ナロードが彼の面前に姿を見せることになった。ナロードが作りあげてきた、それまで彼が知っていたものとはまったく異なる社会の出現にたいして、彼は当惑し、言葉を失い、立ち止まることになった。そして、自問する——ナロードは真の友人となりうるのか。ナロードに共感し、彼らとともに、ひとつのロシア社会を作ることはできるのか——。したがって、『旅』の中でラジーシチェフが、一方で、ブガチョーフの反乱に代表される民衆反乱を全面的に支持しながら、その同じ民衆を一方的に「美化」したために、リアリストではなくセンチメンタリスト・ロマンチスト、あるいはオプチミストであるというレッテルを張られるのはこのためである。ナロードとその社会にたいする、文字どおり

アルなアプローチは、ラジーシチェフにはまだ定位されていなかった。これまでのロシアの歴史の中で、ほとんど互いを意識することのなかった、こうした二つの相容れない社会をひとつのロシア社会としてとらえるべく、彼の方法は、ここで行き詰まることとなった。それでもなお、社会の確認はなされなければならなかった。

V・ベリンスキイによれば、ラジーシチェフは「社会の言葉で書き始めた」という。ここで述べられてゐる「社会」という語そのものが、いわば筆記体から活字体へと変質をとげてゐることに注目しなければならぬ。

- (1) В. И. Краснобаев, Русская культура второй половины 17-начала 19 в. М., 1983; А. Н. Копылов, Русская культура 18 века в советской историографии начала 80-х годов. — Вопросы истории русской культуры в отечественной и зарубежной историографии. Сб. ст. М., 1986; Ю. М. Лотман, Избранные статьи в трех томах. Т. 2. Таллинн, 1992.

- (2) Н. Rogger, *National Consciousness in Eighteenth-Century Russia*. Cambridge, Massachusetts, 1960.

- (3) 拙稿「A・ラジーシチェフ『ステルフルダからモスクワへの旅』の『ファークロリズム』——『ロシア 聖とカオス』(彩流社、一九九五年)所収。

- (4) ラジーシチェフの友人に関しては、А. И. Старев, Радицев: Годы испытаний. М., 1990. 40-52; Д. И. Кулакова и В. А. Запалов, А. Н. Радицев. «Путеше-

ствие……》: Комментарий. Д., 1974. 参照。

(5) К. В. Чистов, Путешественник по Северу России П. И. Челищев. — На рубеже, 1952-9; В. В. Пименов и Е. М. Эпштейн, Русские исследователи Карелии. Петрозаводск, 1958.

(6) П. И. Челищев, Путешествие по Северу России в 1791 году. СПб., 1886.

(7) А. Н. Радищев, Жизнь Федора Васильевича Ушакова. — ПСС, т. 1. М.-Л., 1938.

(8) 『旅』テキストの最新版 (V・A・ザンズドフ校訂の「文学記念碑」版, サンクト・ステルブルグ, 一九九二年) を使用した。また, 金子幸彦, 渋谷一郎の訳を参照した。

(9) Ю. Н. Тынянов, Литературный факт. — Архивы и новаторы. Д., 1929. (Ф. О. Ринт・Т. Тайニャーノフ「文学的事象」水野忠夫訳——『ロシヤ・フォルマリズム文学論集』) やうか書房, 一九八二年); Г. П. Маковского. Письма русских писателей 18 в. и литературный процесс. — Письма русских писателей 18 в. Д., 1980. さらに友人宛て書簡の文学史的・文化史的意味

をふくむ。 Н. Степанов, Дружеская переписка 20-х годов. — Русская проза. Д., 1926; W. M. Todd III, The Familiar Letter as a Literary Genre in the Age of Pushkin. Princeton, 1976. (一九九四年にロシア語訳を刊行された)

(10) Радищев, Дневник одной недели. — ПСС, т. 1. М.-Л., 1938.

(11) А. С. Пушкин, Александр Радищев. — ПСС, т. 11. М.-Л., 1949. (トントハンズン・トーンキントントハンズン・ラシーニチヤフ) 川端香男里訳——『トーンキント全集』河出書房新社, 一九七三年)

(12) М. Аронсон и С. Рейсер, Литературные кружки и салоны. Д., 1929; Н. Л. Бродский/ред./Литературные салоны и кружки. М.-Л., 1930. 同著者, Формалистич. последние результаты.

(13) В. Г. Велинский, Русская литература в 1841 году. — ПСС, т. 2. М.-Л., 1950.

(一橋大学教授)